

〔研究ノート〕

文徵明の淡彩表現について—「文人的彩色」の探求—

文徵明(1470～1559)は、明代15、6世紀の蘇州で活躍した文人画家として知られます。彼が好んで用いた淡緑、青緑、代赭などの温かい彩色は、子弟を始めとする後の世代に継承され、「文派」と呼ばれる文人画様式の代名詞となりました。こうした淡彩は、しばしば絵画空間の穏やかな光と空気を表していると考えられてきましたが、本文では、また違った観点から、文徵明が彩色に込めた思いを探ります。

文徵明は1489年、20歳の時に、当時蘇州文人サークルの重鎮であった沈周(1427～1509)に謁見し、以後沈周より画を学んだといひます(「沈文合璧卷」文徵明跋)。沈周は、精緻な淡彩画、粗放な墨画など多様な画を描きましたが、特に早期の作とされる「九段錦画冊」(京都国立博物館蔵)は、様々な時代の画家に倣う作に、各々淡彩を施しています。文徵明の1507年の作「雨餘春樹図」(台北故宮博物院蔵、図1)は、陸地や岩塊の輪郭を淡墨で形作り、内側に淡緑を付し、更に淡墨と淡緑の皴で立体感をつけています。こうした表現は「九段錦画冊」第五図「寒林掃艇図」(図2)に近似します。淡彩を自身の画風としてゆくうえで、沈周の表現から多くを学んだことがわかります。

文徵明は特に1530年代、淡彩画の優品を集中して制作しています。「倪瓚江南春詞意図卷」(1530年、上海博物館蔵)、「石湖清勝図卷」

(1532年、上海博物館蔵、図3)などは、沈周を通して得た淡彩表現が、自己様式として確立したことを窺わせます。この頃の文徵明は、彩色をどう捉えていたのでしょうか。1535年に、自身が40年前に描いた画の前に、次のように想起しています。「40年前の私は、友人の唐寅(1470～1523)と『画を描くときは六朝時代(3～6世紀)の画法を参考にすべきだ』と言っていた。しかし古画は見る事ができず、画法も残っていないので、よくわからないままこの画を描いた。色を付し墨を施すことは、必ず閑淡(素朴で淡泊)であることを貴いとした。今この画を見ると笑うばかりだが、最近の濃厚で華美に過ぎる画よりは、いくらか古意(古の情緒)があると思う。…古意とはただ色彩の外にあるのだ。」(「題画」)この言及から、40年前の文徵明の作品は、六朝時代のような古画の画風に自分なりに表した作であったとわかります。当時の文徵明は、素朴で淡泊な設色行墨を好み、それに古意を託して描いたようです。拙いなりに、最近の画よりは古意があると評価しています。ここで彼の言う最近の画とは、同時代人の倣古作、更には当時出回っていた、六朝時代などの伝承を持つ、濃厚な色を施した古画の贋作(梁・伝張僧繇「雪山紅樹図」、台北故宮博物院蔵、図4。明代の作とされる)を指すでしょう。この言の3年前となる1532年、文徵明は「関山積雪図卷」(台北故宮博物院蔵、図5)という雪

景図を完成させています。唐の文人画家・王維の画風に倣ったとみられる本図は、山容などに古様を感じさせつつも、全体を1530年代の文徵明画に顕著な、穏やかな淡彩でまとめています。これは先述した、かつて彼が古意を託した「閑淡」な彩色でもあったのではないのでしょうか。文徵明は「古意は色彩以外にある」とも述べていますが、付彩を濃厚華麗にすれば古様になるという、当時の安易な傾倒に対する苦言は、一方では倣古に適する彩色への関心を窺わせます。ここで沈周の「九段錦画冊」を想起すれば、本図も淡彩を施した倣古画冊です。本図は、どの時代の画家に倣った作も概ね穏やかな淡彩でまとめています。40年前つまり1495年は、文徵明が沈周に直接画の教示を受けていた時代です。当時沈周の倣古作を実見し、教示を得る中で、文徵明は倣古における淡彩の利用を見出したかもしれません。

また文徵明は1501年に、沈周画の贋作が横行していることを憂い次のように述べます。「贋作を造る画工達は、先生の画のすばらしさが三昧の境地(自らを忘れ、物事に没入する状態)を内包しているためで、その意は色で伝えるものではないと知らないのだ。」(「題石田先生画」)ここでも文徵明は、沈周の贋作が色に偏っている点に着目し、真作との違いを述べます。この言及の背景には、彩色といった表面的なものを重視する画工ひいては職業画家に対し、画家自身の内面を重視し、画の優れていることはその発露とする、文人画家である自分達を区別する

意識が窺えます。中国の画論において、しばしば付彩は画の真を伝えぬものとされてきました。文徵明は文人画家として、自身の付彩が画工のそれと一線を画すものでなければならぬことを、当然常に意識していたでしょう。

文徵明は1520年には、文人画家ならではの彩色を試みていたようです。文徵明「石湖花游曲詩画卷」(上海博物館蔵)は、彼の愛した蘇州の名勝・石湖にまつわる詩画卷です。元時代の1348年、楊維禎(1296～1370)といった著名な文人達が石湖で雅会を行い、その際に詠まれた「石湖花游曲詩」を文徵明が書して詩卷(1514年)とし、それに合装するため石湖の景を描いた画卷(1520年、図6)がなされました。本図では石湖湖畔の山々を、明るい淡緑と青緑で表しています。文徵明は詩卷の自題で「詩詠といった文人の行いが、湖山の気を増す」と述べており、こうした考えは、当時の文人間で共有されていました(「石湖花游曲詩画卷」文彭・文嘉跋)。したがって本図の淡彩は、「石湖花游曲詩」の雅会を始め、石湖の地で営まれてきた文人の営為により、豊潤な氣に満ち、土地の品格を高めた石湖を表したものとして、文人達に理解されたと考えられます。共有できる文人達だけが、この彩色から石湖に蓄積する文雅の記憶を読み取り、自らもその一員であることを思うことができたのです。こうした作用は、1532年の石湖図「石湖清勝図卷」の淡彩でも同じだったでしょう。

彩色自体への高い評価を窺わせる言及を、文徵明は必ずしも残していませんが、生涯の画業の中で継続的に淡彩を用いました。その中で文人画にふさわしい、いわば「文人的彩色」とはいかなるべきかを、沈周そして過去の文人画家の作例も参考にしつつ問い続けたのではないのでしょうか。(都甲さやか)

※図1、4、5は『故宮書畫図録』(台北故宮博物院、1989年～)、図2は『特別展 蘇州の見る夢—明清時代の都市と絵画—』(大和文華館、2015年)から複写し、図3、6は上海博物館より提供いただきました。



図 1



図 2



図 3

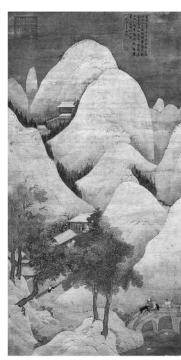


図 4



図 6



図 5